

# 黄道周と沙孟海

——書法審美範疇語〈適媚〉をめぐる

河内 利治

## 一、問題点の所在

書の美しさを評する用語に〈適媚〉がある。稿者は既に「書法審美範疇語〈適媚〉考」<sup>①</sup>において、歴代書品論に見える〈適〉〈媚〉〈適媚〉字術語それぞれの用例を検討して「〈適媚〉術語形成過程図」に整理し、魏晋から初唐では王羲之の書の称賛に、盛唐から晩唐では筆力〈適勁〉と姿態〈妍媚〉による伝統書法の批評に、宋代以降は〈適勁婉熟〉と〈柔媚円熟〉が融合した顔真卿の書の称賛に用いられることを論証し、〈適媚〉は「力強くひきしまった美しさ（の書）」であると定義した。

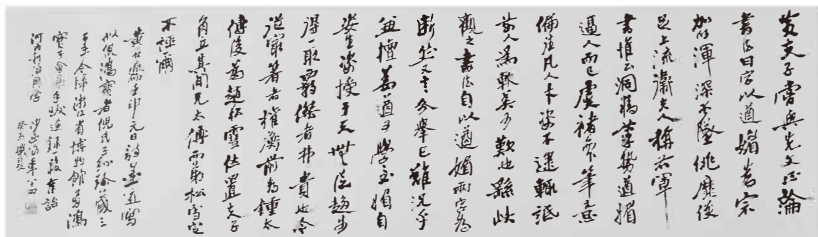
この〈適媚〉を「書字自以適媚爲宗」と書の要諦と考えた人に明末清初の黄道周（一五八五～一六四六）がおり、その黄道周を「明季書人第一」と高く評価した人に沙孟海（一九〇〇～一九二二）がいる。小稿では沙孟海書《遼録倪会

鼎手跋》<sup>③</sup>などを手懸りにして、沙孟海（以下、沙老と記す）が何故に黄道周を「明季書人第一」と高く評価したのかを考察してみたい。すなわち黄道周が提示した〈適媚〉を沙老がどのように受け止めていたのか、言いかえれば、明末から現代における〈適媚〉に対する一歩進めた考察を行うものである。

## 二、沙孟海書《遼録倪会鼎手跋》

縦四〇cm×横一三六cmの本書跡は、癸亥盛夏（一九八三）に沙老（書写時八四歳）から稿者の留学修了記念に頂戴した墨宝で、次のABC三つの段落から構成されている。（傍線、傍点および英数字・丸数字は稿者が付す、以下同じ。）

A 黄夫子嘗與先文正論書法曰、「字以適媚爲宗、加以渾深、不墜佻靡、便足上流。衛夫人稱右軍書、惟云洞精筆勢、適媚逼人而已。虞褚而下、筆意偏往。凡人才姿



沙孟海書《跋倪会鼎手跋》

不逮、輒詆前人爲軟美、可歎也。」繇此觀之書法、自以「適媚」兩字爲斷。

沙老が、黄道周と倪元璐が書を論じた一文を抄録して、黄道周は「適媚」二字に基づいて書を判断していると考えられる一段である。よってこの一段は沙老の黄道周観を端的に示す重要な文章である。

学問の師である黄道周先生は嘗て先父倪元璐と書法を論じた文章に、「字は遒勁で柔媚な風格が要諦であり、さらに雄渾で深みと厚みが加われれば、軽く上滑りな弱々しさを免れ、そうしてはじめて一流（の美の境地）に達することができる。衛夫人は王羲之の書を称賛して、流利精妙な筆勢があり、〈適媚〉が人にせ

まってくると言った。虞世南や褚遂良以降は、筆意が偏っている。そもそも人の才智と容姿は（王羲之に）及ばないし、しばしば先人を誹って「軟美（＝柔媚）」とみなすが、嘆かわしいことだ」と言っている。（私に沙老は）この一文を読むと、黄道周が「適」と「媚」の二字に基づいて書を判断されていることが解る。

以上が文意であるが、冒頭の「黄夫子嘗与先文正論書法」は次の「与倪鴻宝論書法三則」第一則を指している。<sup>(4)</sup>

①書字自以適媚爲宗、加以渾深、不墜佻靡、便足上流矣。衛夫人稱右軍書、亦云洞精筆勢、適媚逼人而已。虞褚而下、逞奇露艷、筆意偏往、屢見蹊逕。顏柳繼之、援戈舞雉、千筆一意。自此以還、遂復顏徹、略不堪觀。才姿不逮、乃詆前人、以爲軟美、可嘆也。宋時不尚右軍、今人大輕松雪、俱爲淫遁、未得言詮。

——内閣文庫蔵『黃漳浦集』卷一九、二一B頁  
倪会鼎（一六二一～一七〇六）は十六歳で諸生に補せられ、その後、先父倪元璐（一五九三～一六四四、諡文正、字玉汝、号鴻宝）の命に従って黄道周に学業を受けた。それゆえ父が亡くなった時、師であり父の畏友であった黄道周先生に「倪文正墓誌銘」の撰書を頼んだのである。<sup>(5)</sup>倪会鼎こそ、黄道周と倪元璐の二人の間柄を最もよく知る人物

であり、二人の書跡を数多く見ていた人物である。

B 然又言、「分舉已難、況乎兼擅。蓋適可學至、媚自姿生。姿授于天、無法趨步。得一取霸傑者、弗貴也。今從最

著權衡、前爲鍾太傅、後爲趙松雪、位置夫子角立其間、兄太傅而弟松雪、定不誣爾。」

倪会鼎が《適》と《媚》を論じて、それぞれに定義を下し、黄道周先生を鍾繇と趙孟頫の間に併置するとみなす一段である。

（倪会鼎は）そしてまた言っている。「《適》と《媚》のどちらか一方を）分けてとりあげるのは難しいし、まして両者を兼ね備えて自由自在に筆を操るのはもっと難しい。思うに《適》は学んで修めることができるが、《媚》はその容姿から生まれるものである。容姿は天よりの授かりもので、歩み寄るすべが無い。筆勢がやたら強いだけの「霸傑」は尊重しない。今の世、最も權威のある者は、先に鍾繇があり、後に趙孟頫がいる。師の黄道周先生の書は、その中間に並び立つものである。鍾繇を兄とし趙孟頫を弟としてそのあいだに位置づけることは、必ずしも歪曲ではない」と。以上が文意であるが、前段は倪会鼎の《適媚》解釈論になっている。後段の黄道周を鍾繇と趙孟頫の間に並び立つ者と位置づける見解は、①の「宋時不尚右軍、今人

大輕松雪、俱爲淫遁、未得言詮。」を敷衍するものである。

但し、①では黄道周が王羲之の系統として趙孟頫を捉えているのに対し、倪会鼎には黄道周を王羲之ではなく、鍾繇と趙孟頫の間に並び立つ者と位置づける視点があり、この視点は従来見られないものだけに注目し値する。確かに伝来する黄道周の多くの楷書作品、例えば東京国立博物館蔵の楷書《孝經》には鍾繇の味わいが色濃い<sup>6)</sup>。

加えて前段の《適》と《媚》を「適可學至、媚自姿生。

姿授于天、無法趨歩」と定義する一文も特筆すべきである。《適》は学んで修めることができる。

《媚》はおのずとその容姿から生まれるものである。容姿は天よりの授かりもので、歩み寄るすべが無い。

このように《適媚》二字を分けて細かく定義する視点は、これまた前例がないからである。

また筆勢がやたら強いだけの「霸傑」は尊重しないという指摘も首肯できる。清の劉熙載（一八一三～一八二一）は、「士氣」と「十二氣」を論じ、「士氣」が退ける「十二氣」のなかに《兵氣》を挙げた。この《兵氣》と同義語をなすのが《霸氣》あるいは《殺氣》である。これは「勢い激しく過度に驕横で、突とした不穩の氣」である<sup>7)</sup>。霸者・傑出者には、そのような傲慢な筆勢があるとの見解である。

総じて、倪会鼎の跋文に見える〈適〉と〈媚〉の定義、黄道周の位置づけ、「霸傑」への見解は、いずれも注目すべき内容を含んでいることを指摘しておきたい。

C 《黄石齋壬申元日詩墨迹》 寫似倪鴻寶者。倪氏子孫珍藏三百年、今歸浙江省博物館。有鴻寶子會鼎手跋、遶錄一段、奉詒河内利治同學。沙孟海年八十四。癸亥盛夏。〔沙文若璽〕

《黄石齋壬申元日詩墨迹》の伝来と落款の一段である。

現在浙江省博物館に収蔵される《黄石齋壬申元日詩墨迹》は、書写時から三百年を経て、沙老が館長時代に倪元璐の末裔から寄贈を賜ったという。

この書跡については、沙老が別の文章で次のように書いている。

②黄写的《壬申元日》六首詩墨迹、倪元璐身後落入鄰居之手（其人字硯鄰、不詳姓名。箋尾鈐藏印曰「蔡氏書印」、或即其人）。他配上倪元璐「瘦雲肥雨」四大字墨迹、合裝成冊、請倪元璐之子会鼎題一篇長跋、宝藏着。不知何年、此冊由倪氏後人收回、藏于倪氏宗祠。三百年來、未曾出過上虞景境。直到新中国建立之初、倪氏裔孫鄭重地捐獻浙江省文物管理委员会、今藏浙江省博物館。

——「倪元璐、黄道周書翰合冊」——文物出版社《書

法叢刊》第二五輯・一九九二年第一期／上海書畫出版社『沙孟海論書文集』一九九七年收錄

黄道周は崇禎五年（壬申・一六三三）正月、倪元璐に《黄石齋壬申元日詩墨迹》を書き贈った。<sup>(8)</sup>これには、倪元璐の四文字の大きな題字「瘦雲肥雨」が巻首にあり、黄道周小楷《壬申元日詩》の後に、倪会鼎が題した一篇の長い跋文がある。上述のB「分拏已難、…定不誣爾。」はその抄録である。

さらに沙老は次のように書き足している。

③黄道周「書品論」有一段話：『……如欲骨力嶙峋、筋肉輔茂、俯仰操縱、俱不由人、抹蔡（襄）掩蘇（軾）、望王（羲之）逾羊（欣）、宜無如倪鴻寶（元璐）者。但今肘力正掉、著氣太渾、人從未解其妙耳。』黄道周極贊倪元璐的造詣、實際上也便是他提出對書學的旨趣和方向。這幾句話值得重視。有明一代能够說這話的有幾人？清代至今能够理解這話的有幾人？倪会鼎是倪元璐之子、拜黄道周為師。他在本冊跋文說：「世以夫子与先公并称。先公適過于媚、夫子媚過于適。同能之中、各有独勝。」又說：「今從最著者權衡、前為鍾太傅（繇）、後為趙松雪（孟頫）、位置夫子角立其間、兄太傅而弟松雪、定不誣爾。」歷史上很少人給予過黄、倪二家書



法的評価、偶有看到、也多少不中肯（如宋肇比黃道周与虞世南、柳公權）。倪会鼎親受父、師的薰陶、這些話或者有分量的。節錄于此、供海內外書家參考。

——同前

右文中の「書品論」の該當箇所は次の通りである。

④行草近推王覺斯。覺斯方盛年、看其五十自化。如欲骨力嶙峋、筋肉輔茂、俛仰操縱、俱不繇人。抹蔡掩蘇、望王逾羊、宜無如倪鴻寶者。但今耐力正掉、著氣太渾、人從未解其妙耳。

——内閣文庫藏『黃漳浦集』卷一四、9B頁

沙老はこの「書品論」の言葉を引用した理由を次のように書いている。「黃道周は倪元璐の書の到達した境地（造詣）を激賞している。これは実は、黃道周の書学に対する意図（旨趣）と目標（方向）を提示している。この言葉は注目に値しよう。明代にこのように言える人物が何人いるだろうか。また清代にこのように言える人物が何人いるだろうか」と。すなわち沙老は、黃道周の書の到達すべき境地として右④「書品論」の一文を把握しているのである。

また沙老は、倪会鼎の跋文「世以夫子与先公并称。先公適過于媚、夫子媚過于適。同能之中、各有独勝。」と「今從最著者權衡、前為鍾太傅（繇）、後為趙松雪（孟頫）、位

置夫子角立其間、兄太傅而弟松雪、定不誣爾。」を引用して、倪会鼎の見解を賞賛している。その理由は、「歴史上、黃倪二家の書を評価する人は少ない。偶然見たものの中には、いくつか首肯しがたいものがあつた（たとえば宋肇は黃道周を虞世南、柳公權に擬えている）。倪会鼎は父の薰陶師の薰陶を受けており、この言葉にはあるいは重みがあるかもしれない」からであり、よつて「ここに節録して、海内外の書家に供したい」と結ぶのである。

波線部はBの後段に引用した跋文であるが、③の前段の跋文「世以夫子……各有独勝」は、「沙孟海書《遼録倪会鼎手跋》」に見られない箇所である。すなわち、「世の中では、師黃道周先生と先父倪元璐を併称するが、父の書は《適》が《媚》よりも多く、師の書は《媚》が《適》よりも多い。両者とも《適》と《媚》を能くするが、それぞれに勝れるところがある」との見解は、沙老が指摘する通り、「この言葉にはあるいは重みがあるかもしれない」ものである。というのもBの前段の《適》《媚》の定義と併せると、「重みのある」《適媚》比較論になっていると言えるからである。

以上から、ABC三段、①②④の文章および倪会鼎の跋文を合せて考えると、核心は次の三点になるう。

i 「与倪鴻宝論書法三則」第一則から、黄道周の書の要諦が〈遁媚〉にあること。

ii 《黄石齋壬申元日詩墨迹》の倪会鼎の跋文から、黄と倪は生前より併称され、両者とも〈遁〉と〈媚〉を能くするが、それぞれに勝れるところがあること。また黄を鍾繇と趙孟頫の間に並び立つと位置づけること。iii 沙老がこれらの見解を激賞し、踏襲していること。

### 三、沙老の黄道周に関する文章

沙老はなぜこのように黄道周を重んじ、〈遁媚〉を称賛し、倪会鼎の跋文を節録されたのであろうか。その理由は、若い頃に執筆された文章に、既に説かれている。

一九二八年に脱稿し、一九三〇年『東方雜誌』第二七卷第二号に発表した論文「近三百年的書学」に、黄道周の書に対する先見的な観点が提示されている。

「近三百年的書学」は八節からなり、その第三節「帖学——以晋唐行草小楷為主」では、(A)二王の範圍内で活動を求めた董其昌、王鐸等、(B)二王以外に別の道を切り拓いた黄道周、倪元璐、沈曾植に分かれる、と論じている。

⑤黄道周、字幼平、一字幼玄、号石齋、福建漳浦人、官礼部尚書、武英殿大学士、諡忠烈。明季書家、可以奪

王鐸之席的、只有黄道周。黄道周學問品格、皆第一流。他对于書法、要在二王以外另辟一条路徑出来。他大約看厭了千余年来陳陳相因的字体、所以会發這個弘愿。我們看了鄭杓的「書法流傳圖」、便見到羊欣、王僧虔一下的歷代許多書家都是王羲之的一本相伝的。王羲之的字、直接受自衛家、間接是學鍾繇的、圖中对于鍾繇系下、除却他的兒子和外甥外、更没有嫡伝的人。黄道周便大胆地去遠師鍾繇、再參入索靖的草法。波磔多、停蓄少；方筆多、圓筆少。所以他的真書、如斷崖峭壁、土花斑駁；他的草書、如急湍下流、被咽危石。前此書家、怕没有這個奇景罷。

——上海畫出版社『沙孟海論書文集』一九九七年  
この一文の後段では、黄道周の書は「王羲之から別の道を切り拓き、……大胆に鍾繇、索靖を遠く師と仰いだ。波磔が多く、停留が少なく。方筆が多く、圓筆が少なく。そのため楷書は断崖絶壁で苔むすかのように古色蒼然とし、草書は急流が直下し水しぶきに岩石が咽ぶかのように力強い筆勢である」と論じ、その用筆法と書法美を指摘している。その後、一九七三年に書かれた「黄石齋商刻經義手札册跋」は、「書品論」と「与喬柘田尺牘」の宋犖と沈曾植の詩を引用して、沙老自身の見解を示すものである。

⑥石齋与倪鴻宝、王覺斯進士同年、在翰苑相約學書、各有成就。石齋著「書品論」有云：「行草近推王覺斯。

覺斯方盛年、看其五十自化。如欲骨力嶙峋、筋肉輔茂、俛仰操縱、俱不繇人。抹蔡掩蘇、望王逾羊、宜無如倪鴻宝者。但今肘力正掉、著氣太渾、人從未解其妙耳。」余觀石齋稱鴻宝數語、正是自斬嚮。骨力四句、尤関書學旨要。卒其所詣、遂為明季書人第一、非偶然矣。

——上海書畫出版社『沙孟海論書文集』一九九七年  
⑦沈乙龔題石齋与喬柘田手札詩：「筆精政爾參鍾索、虞柳擬焉將不倫。微意祇應鴻宝會、《擬山園帖》亦何人（自注：漫堂擬虞柳、非也）。」從來評石齋書、無如此詩允愜、故憶錄之。——同前

⑥の波線部は、③および④に引いた箇所であるが、注意すべきは、それに続いて、沙老が「私は黃道周が倪元璐を稱賛する數語を觀て、これこそ正に（黃道周の）斬嚮（理想・志向）である」と考へる。骨力の四句は、もともと書學の要旨に關わつており、その到達した境地を、明季書人の第一とみなすことは、偶然ではない」と断言している点である。すなわち「骨力嶙峋、筋肉輔茂、俛仰操縱、俱不繇人」の四句が、「もともと書學の要旨に關わつている」という点である。

「骨力嶙峋」とは、「骨力」が重厚で幽深な味わいがあることをいう。

「筋肉輔茂」とは、「筋」と「肉」が互いに助け合つて充實感があることをいう。

「俛仰操縱」とは、運筆を自由自在に操ることをいう。

「俱不繇人」とは、上記三句がすべて他人に由るものではないことをいう。

この四句をまとめると、〈骨力〉をしつかりと重厚にし、〈筋肉〉でそれを充實感があるように輔佐し、それを自由自在に運筆して、それらが他人の書法に由らないようにする、ということになる。

言いかえれば、「骨力嶙峋、筋肉輔茂、俛仰操縱、俱不繇人」の四句は、「字自以適媚為宗、加以渾深、不墜佻靡、便足上流」の實踐的解釈である。なぜならば、「骨力嶙峋、筋肉輔茂」と「字自以適媚為宗、加以渾深」、そして「俛仰操縱、俱不繇人」と「不墜佻靡、便足上流」とが呼応するとみなせるからである。そもそも「骨力」と「筋肉」は、人が〈適媚〉と感じる書の根本要素であり、それに「渾深（雄渾な深み）」が加われれば「輔茂」できるのであり、「佻靡」に墜ちないように「俛仰操縱」すれば、「俱不繇人」にして「便足上流」になるからである。

さらに一九八〇年に書かれた「我的学書經歷和体会」では二〇代に黄道周の書と出会ったことが回想されている。

⑧看到神州国光社等处影印的黄道周各体書、也多用方筆結字尤新奇、更合我胃口、我就放棄王右軍旧体、去学黄道周。……廿三歲、初冬到上海、沈子培先生（曾植）剛去世。我一向喜愛他的書跡、為其多用方筆翻轉、詭變多姿。看到他《題黄道周書牘詩》（即題《与喬柘尺牘》詩）：「筆精政爾參鍾索、虞柳擬焉將不論。」（宋肇旧跋說黃字似虞世南、柳公權）、給我極大啓發、由此体会到沈老作字是參用黄道周筆意上溯魏、晋的。我就進一步去追黄道周的根、直接臨習鍾繇、索靖諸帖、并且訪求前代學習鍾、索書体有成就的各家字迹作為借鑑、如唐代的宋儋、宋代的李公麟、元末的宋克等人的作品、都會臨習取法。

——上海書畫出版社『沙孟海論書文集』一九九七年文意は次の通り。神州国光社等が影印する黄道周の各書体の書も、方筆を多用し、結字はとりわけ新奇で、さらに私の好みに合うので、王羲之の旧体を学ぶことを放棄して、黄道周を学び始めた。……二三歳の初冬に上海に行くと、沈曾植先生が世を去られたばかりであった。私はずっと沈先生の書跡が好きで、それは方筆と翻転を多用し、字形が

変化に富んでいる。沈先生の《題黄道周書牘詩》（《与喬柘田尺牘》の題詩）に「（黄道周の）筆は精緻で正しく鍾繇、索靖をまじえており、虞世南や柳公權に擬えるのは論ずるまでもない」（宋肇の旧跋に黄の字を虞世南、柳公權に擬える）とあり、極めて大きな啓発を受け、このことから沈先生の書は黄道周の筆法の上に、魏晋をまじえていることを感じとった。私はさらに黄道周の根源を追いかけて、鍾繇と索靖の諸帖を直接臨書し、あわせて歴代の鍾繇と索靖の書体を学習して成功した各家の書跡を手本とした。例えば唐代の宋儋、宋代の李公麟、元末の宋克等の作品は、すべて臨書して筆法を取得した。

まず好きな書、沈曾植が前提となっていることが解る。それは用筆、字形から直感的にもたらされ、その直感（美的経験）を裏づける文章（沈曾植の跋文）と出会うことによって、黄道周への嗜好が強まり（美的態度）、黄道周の筆意の「根（根源・拠って来たるところ）」を求めるために鍾繇、索靖へと遡り、さらに鍾繇、索靖を学んだ諸家を追究した、という学書の方法と経緯が端的に語られている。すなわち左のような流れである。

沈曾植↓黄道周↓鍾繇・索靖↓宋儋・李公麟・宋克  
重要なのは、単なる嗜好に留まらず、それを高めていくた

めの言葉「(黄道周の)筆は精緻で正しく鍾繇、索靖をまじえており、虞世南や柳公権に擬えるのは論ずるまでもない」といった書論が必要であり、それを信じ確かめて行く行為(美的実践・美的表現)にある。

沙老は稿者に「沈曾植の七絶詩(右記および⑦⑧傍点部)は、黄道周の書法批評のもっとも妥当なものである」とおっしゃった。この詩は墨迹の跋文であるのみならず、黄道周の書を総括するものであると言えよう。

#### 四、《黄石齋先生尺牘真迹》諸跋

伝来する黄道周の書跡は数多く、序跋が書かれている書跡も多く伝来している。その一例として、⑧の文章に見える上海商務印書館一九三三年影印《黄石齋先生尺牘真迹》所収「与喬栢田尺牘」を採り上げてみる。これには、宋桢(二六三五〜一七一四、字牧仲、号漫堂、何紹基(一七九九〜一八七三、号東洲)、張穆(一八〇八〜一八四九、号石洲)、沈曾植(一八五〇〜一九二二、号乙盦)、鄭孝胥(一八六〇〜一九三八)といった大家が跋文を付している。

宋桢の跋「今觀諸札、正書甚勁、渴筆復遒、即專以書法賞之。亦当拮抗虞柳。」は、黄道周の筆意を虞世南、柳公権に擬えているが、沈曾植はこの説を疑い、沙老は上述し

たように沈氏の見解に賛成し、宋説を否定している。審美範疇語としては〈勁〉〈遒〉を挙げる。

何紹基の跋「余惟忠端書法根巨晋人、兼涉北朝剛勁之中、自成精熟、迴非文(徵明)、董(其昌)輩所敢望。」は、すでに黄道周の書は晋人を基礎とすると言っている。審美範疇語としては〈剛勁〉を挙げる。

沈曾植の詩跋「筆精政爾參鍾索、虞柳擬焉將不倫。微意祇應鴻宝会、《擬山園帖》亦何人。」は、宣統庚申(一九二〇)八月の作で、審美範疇語は見られないが、「(黄道周の)筆は精緻で正しく鍾繇、索靖をまじえており、虞世南や柳公権に擬えるのはおかしい。倪元璐だけがその微意を知っており、王鐸にもわかるまい」と喝破している。

鄭孝胥の詩跋は、庚申(一九二〇)冬至から七日目に、「書品論」の言葉などを用いて作った五十句からなる長篇の五言古詩である。

忠端多名迹、可敬亦可愛。略觀近人藏、此卷宜爲最。  
東洲與石洲、兩跋已云備。乙盦爲六詩、逸韻轉奇肆。  
我觀書品論、迂謹有殊致。茂弘安石間、逸少乃其次。  
正坐書掩名、釣弋等能事。學中七八乘、作書特末藝。  
豈堪溷長者、曾不辦法意。作書莫作草、懷素尤爲厲。  
君實與明道、不草究何礙。時人解章草、黃謝若小異。



雲間周思兼、獨往擅妙詣。行草推覺斯、未老鋒猶銳。  
未若倪鴻寶、掩蘇當抹蔡。縉紳憚小楷、率爾趁筆勢。  
一札才四行、大書那足貴。又與鴻寶書、持論主適媚。  
以此攷所見、言行實不背。昔嘗睹榕頌、雋拔有古味。  
樟讞與干文、天壤或猶在。善書輕其書、小技故可媿。  
荊公賦顏碑、語意絕相類。吾生無死所、媿活視前輩。  
猶期樹名節、何用托文字。

詩意は次の通り。黄道周には名跡が多く、それらは尊敬し愛惜すべきものである。近頃の收藏品をだいたい見たが、この巻き物を最上とすることができよう。何紹基と張穆の二人の跋文が、すでに言い得ている。沈曾植は六首の詩を作り、すばらしい味わいは益々奔放である。私（鄭孝胥）は「書品論」を読むと、謹直で殊のほか趣がある。「王導と謝安のあいだに位置し、王羲之はその次である。坐を正し（礼節を重んじ）て、書がその名声を覆い隠し、釣りや狩などが得意である（ことの方が伝わる）。それらは学問上の七番か八番の此事であり、書を書くことはそのなかでも未芸である」という。どうして書に長じる者を汚し、筆法や筆意が解らないことに耐えられようか。書を書いてても草書を書いてはならない。懷素はもつともひどい例である。司馬光と程顥は、草書にどのような弊害があるかを追究し

なかった。今の人は章草を理解しても、黄道周と謝肇淪<sup>⑩</sup>がやや異なるとするぐらいである。董其昌はひろく思い兼ね、絶妙な境地を独り占めた。「行草は王鐸を推奨する。まだ老いていないのに筆鋒が鋭い。（王鐸は）倪元璐に及ばず、（倪元璐は）蘇軾や蔡襄を超えている」ともいう。官僚たちは小楷を嫌い、思うがまま筆勢を追いかけている。一通の手紙はわずか四行、大字は珍重するに足らない。また「倪元璐に送った手紙では、論を立てて〈適媚〉を主張している。これらことから見てきたものを考えると、本当に（黄道周は）言行が乖離していない。かつてその「榕頌」を見たが、才能が傑出していて古味があった。「樟讞」と「干字文」<sup>⑪</sup>は、この世にまだ有るのだろうか。書を善くする者はその書を軽んじるし、小技はことさら恥じるもの。王安石が顔真卿の碑拓を詩に詠じたが、語意がとてもよく似ている。わたしには死に場所がない、愉快に暮らして先人と比べよう。名節をうちたてるのに、どうして文字に託す必要があるうか。

本詩は一見して、鄭孝胥が黄道周の書論を熟読していたことがよく解る詩である。「又与鴻寶書、持論主適媚」の句は、冒頭に引用した沙孟海書《彙録倪会鼎手跋》Aすなわち「与倪鴻寶論書法三則」第一則の①に他ならず、〈適



媚》を論じたことに焦点を当てて作句されている。波線部は「書品論」からの引用であるが、見方を変えれば、「書品論」を基本に他の書論を加えて作詩しているとも言える。

## 五、小結

《遼録倪会鼎手跋》は、沙老自身が黄道周の書を如何に理解しているかの研究史料でもあった。というのも、黄道周の書論にある《遁媚》を要諦とする箇所を書写し、倪元璐の長子倪会鼎の跋語の《遁媚》の定義を抄録するのみならず、同時に沙老が追究した黄道周から鍾繇・索靖を基軸とする章草の風趣がある書跡でもあるからである。言い換えれば黄道周が要諦とした《遁媚》が、沙老個人の美意識の基盤となつて表現されていると考えられるからである。

沙老は黄道周を、書道史の観点から二王とは別系統の道を切り拓き、「明季書人第一」と高く評価したが、それは単なる史実の指摘に留まらず、《遁媚》を風格の基盤とする別の書法審美の系譜を切り拓いたからでもあったと言えるよう。

最後に、現代の西洋美学には、1 ポスト分析美学、2 多元文化主義、3 マルクス主義と文化批評、4 実用主義美学の四つの基本的傾向があるとされるが、1 ポスト分析美

学の重要な問題が「何が美学であるか」ではなく、「美学は何ができるか」にあるとする考え方は、東アジアの書美の探究、解明にも当てはまろう。すなわち「書法美学（書法審美）」の研究は何ができるかである。本稿はそのような観点から考察を行ってきた。今後も美学の視点から書进行分析したいと考えている。

## 注

- (1) 拙稿「書法審美範疇語《遁媚》考」——書学書道史学会編『書学書道史研究10』五七頁〜七四頁、二〇〇〇年九月三〇日発行所収。その後『書法美学の研究』四九頁〜一〇二頁、汲古書院、二〇〇四年六月発行に収録し、「書法審美範疇語《遁媚》考釈」——『漢字書法審美範疇考釈』四一頁〜九〇頁、上海社会科学院出版社、二〇〇六年五月発行にも収録した。
- (2) 《遁媚》の初出は何延之『蘭亭記』の「蘭亭……、遁媚勁健、絶代更無。」である。
- (3) 本稿は平成二三年二月九日に川越女子高等学校において開催された埼玉県高等学校書道教育研究会における講演「書法的美意識——沙孟海と黄道周の《遁媚》をめぐって」を基に加筆訂正したものである。また本稿に先立ち次の三篇の文章を発表している。

1 「緬懷導師沙孟海」——『百年名社・千秋印学』国際印学

研討會論文集》三九五頁～四〇〇頁、西泠印社出版社、二〇〇三年一〇月。

2 「恩師沙孟海先生筆《移錄倪會鼎手跋一段》」——『大東文化』大學紀要《人文科学》第四二號、一五一頁～一六〇頁、二〇〇四年三月。

3 「沙孟海和黄道周——〈適媚爲宗・加以渾深〉」——浙江省書法家協會編《沙孟海論壇》暨中國書法史學國際學術研討會論文集》一九三頁～一九九頁、浙江古籍出版社、二〇一〇年九月。

なお二〇一〇年の一年間は「沙孟海先生誕辰一一〇周年」紀念年で、杭州を中心に研討会のほか多くの交流活動や展覧会が開催されたことを記しておきたい。

(4) 拙稿「黄道周の書論」——『中国文化』漢文学会会報48号、一九九〇年所収参照。

(5) 拙稿「倪元璐と黄道周——応酬詩と墓誌銘を中心に」——『中国文化』60号、二〇〇二年所収参照。

(6) 拙稿「黄道周獄中手書《孝経》考」——『中国文化』59号、二〇〇一年所収参照。

(7) 拙稿「劉熙載の書品論（下）——〈力〉〈氣〉字術語考」——『書法美学の研究』一六七頁～二〇三頁、および『漢字書法審美範疇考釈』一四七頁～一七二頁を参照されたい。

(8) 《黄石齋王申元日詩墨迹》は、『楷書詩翰冊』または《倪元璐黄道周書翰合冊》とも呼ばれている。『楷書詩翰冊』とするのは、上海人民美術出版社《芸苑掇英》第一八期（一九八二年

十月、浙江省博物館藏品特輯号）であり、沙孟海題字《浙江省博物館藏品選》も同じである。《倪元璐、黄道周書翰合冊》とするのは、文物出版社《書法叢刊》第二五輯（一九八一年三月）である。

(9) 〈骨力〉は精神、内面から発する「骨格の筆力」であり、運動性を感じる表現、構成の本体である。〈筋肉〉は〈筋〉と〈肉〉の相對關係によつて形作られ、運動性を感じる表現、構成の要素である。拙著『書法美学の研究』および『漢字書法審美範疇考釈』を参照されたい。

(10) 謝肇淛（一五六七？～一六二四？）は明末の學者、字は在杭号は小草齋、福建長樂の人。博学多才で『五雜俎』他を著わす『小草齋集小伝』には「草書は張芝、行書は王羲之のようだ」と評している。

(11) 「榕嶺」は例えば故宮博物院藏「榕嶺卷」（崇禎八年・紙本・行書）が伝来する（榮寶齋出版《中國書法全集56黄道周》一九九四年所収）。

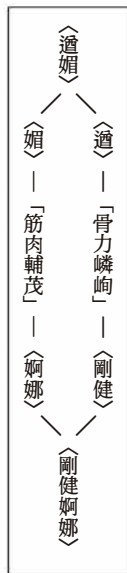
(12) 「樟讖」と「千字文」はともに不詳。侯真平著『黄道周紀年著述書画考』厦門大學出版社一九九四年出版にも見えない。

(13) 「呉長文新得顔公壞碑」（中華書局《宋詩鈔》一の「臨川詩鈔」所収）を指すか。原詩は古詩で次の通り。

魯公之書既絶倫、歲久更爲所珍。荒壇壞冢朽屋、剥落風雨埋煨塵。斷碑數尺誰所得、點畫入紙完如新。延陵公子好事者、拓取持寄情相親。六書篆籀數變改、訓詁後世多失真。誰初妄鑿妍與醜、坐使學士勞骸筋。堂堂魯公勇且仁、出遇世難親經

綸。揮毫卓犖又驚俗、豈亦以此誇常民。但疑技巧有天成、不必勉強方通神。詩歌甘棠美召伯、愛惜蔽帟由思人。時危忠誼常恨少、實此勿復令埋埋。

(14) なお《適媚》と類似する《剛健婀娜》を用いて書を評する場合がある。例えば姜寿田「含剛健婀娜為一體——曾國藩の書法芸術」——上海書画出版社『書法』二一〇三年二月号、二六頁、三〇頁がそれである。姜氏は曾國藩（一八一一—一八七二）の書を、「その書は沈鬱雄挫、骨力内蘊にして適媚を失せず」と評している。よって、《適》を《剛健》に、《媚》を《婀娜》に置き換えて考えることも可能であろう。というのも「骨力嶙峋」にして《適》になり、《剛健》になり、「筋肉輔茂」にして《媚》になり、《婀娜》になり得るからである。図示すれば左の通り。



さらに《剛健》と《婀娜》以外にも《陽剛》と《陰柔》、《豪放》と《婉約》、《沈着痛快》と《優悠不迫》を挙げることができる。これらについては門脇廣文氏との共訳「成復旺著・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』引論・訳注」——大東文化大学『漢學會誌』第四十號、二〇〇一年三月、一六七頁所収の「圖」および拙稿「美的範疇と「書」——大東文化大学人文科学研究報告書『中国美学範疇研究論集』第一集、二〇

一三年三月、一〇一頁所収の「中国美学範疇語体系図」を参照されたい。

(15) 中国美学研究班報告「現代西洋美学の四つの傾向」——大東文化大学『人文科学研究報告』No.17、二〇一一年三月所収。  
(大東文化大学)